

ビジターセッションに対する学習者の意識 -より効果的なビジターセッションの運営に向けて-

井上 佳子、高尾 まり子、寺嶋 弘道、戸坂 弥寿美

アブストラクト

日本語母語話者を教室に招くビジターセッションは、人的リソースを用いた活動の一つとして様々な日本語教育の場に取り入れられている。これまで本学では、教員、母語話者、学習者という3者の立場からビジターセッションに関する研究が行われてきたが、ビジターやビジターセッションに対する学習者の意識に関してはまだ十分に明らかにされていない。そこで、本研究では学習者が期待するビジター像及びビジターセッションの内容を調査しそれを分析することで、ビジターセッションの問題点と改善法を考察した。

質問紙調査の結果、日本語学習者が求めるビジター像とビジターセッションの内容は学習レベルや国籍だけではなく、学習者の個人的背景によっても異なることがわかった。また、インタビュー調査からは学習者が求める具体的なビジター像と内容、それを求める理由が明らかになった。さらにその結果から、ビジターセッションをより効果的に運営するために、①学生ビジターとの交流促進、②社会人ビジターとの交流促進、③ビジターセッションの見直しについて提案した。

キーワード：ビジター像、ビジターセッションの内容、学習者の意識、質問紙調査、インタビュー

1. はじめに

日本語教育では、人的リソースを用いた学習活動の方法の一つとしてビジターセッションが国内外の様々な教育機関で取り入れられている（村岡 1992、中井 2003、宮崎他 2005）。ビジターセッションというのは、教室に母語話者を招き、日本語学習者の学習活動に参加してもらう授業のことで、通常、インタビューやディスカッション、発表などが行われることが多い。ビジターセッションのメリットの一つは日本人との関係を作る方法を知らない、あるいはその機会がない学習者に交流の機会を提供できる点である（小笠 2010）。また、多様な日本人との接触（トムソン他 1999）、談話能力の向上（中井 2003）、言語運用に対する自信の獲得（寺嶋他 2013）といった点もメリットとして挙げられる。

このようなメリットを期待し、筆者らが所属している立命館アジア太平洋大学では開学以来10年以上、2つのタイプのビジターセッションを実施してきた。一つは、学内の英語クラスからビジターを招くセッションで、英語を学んでいる同世代の学生がビジター（以下 学生ビジター）となるものである¹。そして、もう一つは地域に住む一般の人々を招くセッションで、学習者より年上の社会人がビジター（以下 社会人ビジター）となるものである。本学では初級の場合、学生ビジターと交流する機会を必ず設けることが決められているが、中級以上のレベルでは、ビジターセッションの実施やビジターの選択はそれぞれの担当教員に委ねられている。しかし、学習者がどのようなビジターやビジターセッションの内容を期待しているのか明らかにされないまま運営されているのが現状である。本稿では、本学の日本語学習者がどのようなビジターやビジターセッションを期待しているか、また、これまでビジターセッションに参加した学習者がビジターやビジターセッションに対してどのような意識を持っているのかを明らかにし、今後のビジターセッションの運営方法について考えたい。

2. 本学のビジターセッションに関する先行研究

これまでの本学のビジターセッションに関する研究は、教員、母語話者、学習者という3者の立場に注目し行われてきた。まず教員側からの調査としては、本田他（2013）が行った教員に対するビリーフ調査がある。本田らによると、教

¹ 英語クラスの学生の大半は日本語母語話者であるが、日本語で専門講義が受けられる能力を持っている非母語話者も少数含まれる。本稿ではこれらの学生も学生ビジターとみなす。

員は学生ビジターとのビジターセッションでは、学習者が学生ビジターと共に学ぶことを期待しているが、学生ビジターから知識を吸収してほしいという期待は低いという。一方、社会人ビジターの場合、教員はビジターに日本文化や知識を教えること、学習者の聞き役になることを期待しており、そのような教員の期待にそぐわないビジターに対しては厳しい評価をすると考察している。

本田他（2012）は、母語話者側からの調査として、社会人ビジターのビジターセッションに対する意識に着目し、ビジター自身の外国人との接触経験やその地域での在住歴、人生経験がビジターの意識に影響を与えると報告している。例えば、外国人との接触経験が少ないビジターは欧米文化への憧れを持っている傾向があるが、海外在住経験が豊富なビジターは、自分の経験を日本で暮らす外国人のために役立てたい、自分は与える側であるという意識が強い。しかし、学習者との交流を通し、前者は欧米だけが外国ではないと気づき、後者は学習者から学んだという意識が芽生え、与える立場から対等の立場に近づくことを考察している。

学習者側から調査を行ったものとしては寺嶋他（2013）の研究がある。寺嶋らは社会人ビジターとのビジターセッションに参加した中級の学習者を対象に調査を行った結果、ビジターセッションが地域の人に対して良い印象を持つきっかけになり、日本語で話す自信を与えたものの、地域の人と交流したいという意識を高めることにはつながらなかったと報告している。また、問題点として、実施したインタビュー形式のビジターセッションが日本語を話す時間が少ない学習者にとって怖さやストレスを感じさせるものであったこと、言語能力や会話を続ける戦略の不足を感じる学習者がいたこと、社会人ビジターに対する不安や遠慮を感じビジターセッションに否定的な学習者がいたことが明らかになった。さらに、教員はビジターとの相性やビジターの多様性について配慮する必要があることも指摘している。

3. 本研究の目的

以上のように、ビジターセッションに関わる教員、母語話者、学習者それぞれの立場から研究が進められてきたが、学習者のビジターやビジターセッションに対する意識に関してはまだ十分に明らかにされていない。そこで、本研究では学習者の意識に着目し、学習者が期待するビジター像やビジターセッションの内容がどのようなものなのかを調査することにした。これらを明らかにすることで、学習活動としてのビジターセッションのあり方を見直し、より効果的な運営方法について考えたい。

本稿ではまず質問紙調査から期待するビジター像とビジターセッションの内容が学習者の学習レベルや国籍、また、個人的な背景でどのように異なるのかを量的に分析する。さらにインタビュー調査を行い、質問紙調査の回答に対する理由や学習者自身のビジターセッションの経験等を聞き、質的な分析を行う。そして、これまでの先行研究や本研究で得られた知見に基づき、ビジターセッションの問題点とその改善法を考察する。

4. 質問紙調査

質問紙調査では、学習者がビジターセッションを望んでいるのか、望んでいるのであればどのようなビジターやどのような内容のビジターセッションを期待しているのかを聞き、その回答と学習者の学習レベルや国籍、その他の個人的背景などとの関連性を調べた。

対象者は本学の日本語コース（2012年10月～2013年1月）を受講した日本語学習者384名で、レベルによる内訳は初級88名、中級97名、中上級116名、上級83名であった。国籍については、在籍者の多い中国（102名）、ベトナム（66名）、韓国（52名）、タイ（38名）、インドネシア（35名）の5カ国に絞って分析することにした。対象者の詳細な内訳は表1に示す。質問紙は、学習者のレベルや国籍、教室外での日本語使用時間など個人的な背景を問う15項目、希望するビジターの性別や年齢、海外経験などビジターに関する質問7項目、ビジターセッションの形式やトピックに対する希望などビジターセッションに関する質問9項目で構成されている。調査は2012年10月中旬に行った。

表 1 質問紙調査の対象者の内訳

	中国	ベトナム	韓国	タイ	インドネシア	その他
初級	18	22	2	5	14	27
中級	19	10	18	16	7	27
中上級	51	20	10	8	10	17
上級	14	14	22	9	4	20

4.1 ビジターセッションの希望

学習者がビジターセッションを希望するかどうかを調べた結果、表 2、表 3 のようになった。表 2 はレベル別、表 3 は国籍別の回答の結果である。表 2 からわかるように調査対象者 384 名のうち否定的な回答をしたのは 30 名 (約 8%) で、学習者の大部分がビジターセッションを希望していることがわかった。表 2 の結果を肯定と否定に分けカイ 2 乗検定を行ったところ、学習レベルと回答の間には有意な関連性が見られた ($\chi^2(3)=14.4$, $p<.01$)。さらに残差分析を行ったところ、初級は有意に肯定的な回答が多いこと、上級は有意に否定的な回答が多いことがわかった。一方、表 3 の国籍別の回答を見ると、他の国籍と比べ、韓国の学習者は否定的な回答をしている者が多いことがわかる。表 3 の結果を肯定と否定に分け、フィッシャーの直接確率検定²を行ったところ、国籍と回答の間には有意な関連性が見られた ($p<.05$)。

表 2 ビジターセッションの希望 (レベル別)

	とても	少し	あまり	全く
初級	48	38	2	0
中級	45	44	3	5
中上級	39	71	5	1
上級	26	43	9	5

表 3 ビジターセッションの希望 (国籍別)

	とても	少し	あまり	全く
中国	35	61	5	1
ベトナム	31	32	3	0
韓国	18	24	6	4
タイ	16	21	0	1
インドネシア	11	21	2	1

4.2 学習者が期待するビジター像

次に、4.1 の調査において、「全く」を選んだ学習者を除き、学習者が期待するビジター像を分析した。分析の結果は表 4 に示す。まず希望するビジターの性別を問う質問では、レベル別、国籍別のどちらの分析でも「気にしない」という回答が最も多かった。レベル別の分析ではどのレベルも 80% 以上 (初級 92%、中級 88%、中上級 87%、上級 83%) が「気にしない」と回答し、国籍別の分析では韓国の 73% を除き、どの国籍も 85% 以上 (中国 85%、ベトナム 95%、タイ 86%、インドネシア 97%) が「気にしない」と回答していた。また、中国と韓国の学習者は女性を希望する割合が高く、国籍と回答の間には有意な関連性が見られた。女性を希望する学習者について詳しく分析したところ、中国の学習者は 14 名のうち 8 名が、韓国の学習者は 11 名のうち 8 名が男性学習者であった。

希望するビジターの年齢を問う質問では、初級を除く全てのレベルで「気にしない」という回答が最も多く、どのレベルも 40% 以上 (初級 42%、中級 45%、中上級 45%、上級 47%) であった。レベルと回答の有意差を調べたところ、初級の学習者は有意に 10-20 代を希望する者が多いことがわかった。一方、国籍別で見た回答では、中国とベトナムの学習者が「気にしない」を最も多く選び、それぞれ 50% 以上 (中国 52%、ベトナム 57%) であった。また、韓国、タイ、インドネシアは 10-20 代を希望する者が最も多かったが、韓国は他の 2 国と比べると 2 倍近く多かった (韓国 64%、タイ 35%、インドネシア 38%)。国籍と回答の間で有意な関連性が見られたのは、韓国の学習者が希望した 10-20 代と、タイの学習者が希望した 30 代以上であった。

希望するビジターの職業を問う質問では、レベル別、国籍別のどちらの分析でも「気にしない」という回答が最も多

² 本稿では、期待度数 5 未満の桁が全体の 20 % 以上の場合はカイ 2 乗検定ではなく、フィッシャーの直接確率検定を行った。

かった。レベル別の分析ではどのレベルも60%以上(初級60%、中級68%、中上級66%、上級73%)が、国籍別の分析ではどの国籍も55%以上(中国75%、ベトナム65%、韓国62%、タイ57%、インドネシア59%)が「気にしない」と回答していた。レベルと回答の関連性を調べたところ、初級の学習者は学生を、中級の学習者は社会人を希望する者が有意に多かった。さらに、将来日本で就職したいと考える学習者は社会人を希望する者が有意に多いことも分かった。

ビジターの言語使用を問う質問では、初級と中上級のレベルにおいて「日本語とその他の言語」を使用するビジターを希望する回答が最も多かった。初級の学習者のうち78%が、中上級の学習者のうち39%がその回答を選んでいった。レベルと回答の関連性を調べたところ、初級の学習者は日本語とその他の言語を話すビジターを選ぶ者が、上級の学習者は日本語のみを話すビジターを選ぶ者が有意に多かった。一方、国籍別で見た回答では、韓国以外の国籍は「日本語とその他の言語」を最も多く選んでおり、タイの35%を除くと、どの国籍も50%以上(中国52%、ベトナム50%、インドネシア53%)であった。国籍と回答の関連を見ると、韓国の学習者は日本語のみを話すビジターを、中国の学習者は日本語とその他の言語を話すビジターを希望する者が有意に多かった。さらに、学習者の教室外の日本語使用時間との関連を見ると、使用時間が週に2時間未満の学習者は日本語とその他の言語を話すビジターを希望する者が有意に多く、週に5時間以上の学習者は有意に少ないことが分かった。

ビジターの方言使用を問う質問では、どのレベルにおいても「気にしない」という回答が最も多く、どのレベルも60%以上(初級79%、中級68%、中上級64%、上級68%)であった。国籍別においても「気にしない」という回答が最も多く、どの国籍も50%以上(中国52%、ベトナム76%、韓国71%、タイ84%、インドネシア62%)だったが、他国と比べると、中国の学習者は方言を使用しないビジターを希望する者が43%と非常に多く、国籍と回答の間には有意な関連性が見られた。さらに、日本人の友達の数との関連を見ると、友達が4人以下と少ない学習者は方言を使用しないビジターを選ぶ者が有意に多かった。

ビジターの海外滞在経験を問う質問では、どのレベルも「気にしない」という回答が最も多く、どのレベルも75%以上(初級85%、中級83%、中上級76%、上級77%)であった。また、国籍別の回答においても、どの国も「気にしない」という回答が最も多く、それぞれ75%以上(中国80%、ベトナム77%、韓国85%、タイ84%、インドネシア76%)であった。しかし、ベトナムの学習者は海外滞在経験のあるビジターを希望する者が多く、国籍と回答の間には関連性が見られた。

表4 期待するビジター像

質問項目	レベル別、国籍別の回答傾向	レベル、国籍、その他要素との有意差
性別	<ul style="list-style-type: none"> ・レベル別・国籍別のどちらも「気にしない」が最も多い。 ・他国と比べ、中国と韓国の学習者は「女性」を希望する割合が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国籍との間の関連性 ($p < .01$)
年齢	<ul style="list-style-type: none"> ・初級は「10-20代」、それ以外のレベルは「気にしない」が最も多い。 ・国籍別の分析では、どの国籍も「気にしない」が最も多い。 ・韓国の学習者は「10-20代」、タイの学習者は「30代以上」を希望する者が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レベルとの関連性 ($\chi^2(6)=14.1, p < .05$) ・国籍との間の関連性 ($\chi^2(8)=32.1, p < .01$)
職業	<ul style="list-style-type: none"> ・レベル別、国籍別の分析のどちらも「気にしない」が最も多い。 ・他のレベルと比べ、初級は「学生」、中級は「社会人」を選ぶ者が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レベルとの関連性 ($\chi^2(6)=17.1, p < .01$) ・就職したい国との関連性 ($\chi^2(4)=12.5, p < .05$)
言語使用	<ul style="list-style-type: none"> ・初級と中上級のレベルでは「日本語とその他の言語」が、上級では「日本語のみ」が多い。 ・他国と比べ、韓国の学習者は「日本語のみ」、中国の学習者は「日本語とその他の言語」を選ぶ者が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レベルとの関連性 ($\chi^2(6)=71.9, p < .01$) ・国籍との間の関連性 ($\chi^2(8)=26.1, p < .01$)

言語使用		・日本語使用時間との関連性 ($\chi^2(4)=11.6, p<.05$)
方言使用	・レベル別、国籍別の分析のどちらも「気にしない」が最も多い。 ・他国と比べ、中国の学習者は「方言を使用しないビジター」を希望する者が多い。	・国籍との間の関連性 ($p<.01$) ・友達の数との関連性 ($\chi^2(2)=9.6, p<.01$)
海外滞在経験	・レベル別、国籍別の分析のどちらも「気にしない」が最も多い。 ・他国と比べ、ベトナムの学習者は「海外滞在経験のあるビジター」を希望する者が多い。	・国籍との関連性 ($p<.05$)

4.3 学習者が期待するビジターセッションの内容

4.2と同様に4.1の調査において、「全く」を選んだ学習者を除き、学習者が期待するビジターセッションの内容を分析した。分析の結果は表5に示す。

表5 期待するビジターセッションの内容

質問項目	レベル別、国籍別の回答傾向	レベル、国籍、その他要素との有意差
トピック選択	・レベル別の分析ではどのレベルも「教員」と「自分」の2つに約50%で分かれた。 ・国籍別の分析では、ベトナム人学習者は「自分」、インドネシア人学習者は「教員」を選ぶ者が多い。	・国籍との関連性 ($\chi^2(4)=13.8, p<.01$) ・日本語使用時間との関連性 ($\chi^2(2)=7.9, p<.05$)
トピック	・中級レベルを除き、どのレベルもどの国籍も「生活」、「趣味・娯楽」、「歴史・文化」「政治・経済」の順で多い。	— ³
形式	・レベル別、国籍別の分析のどちらも「会話練習」、「日本語でのゲーム」という順で回答が多い。 ・中国の学習者は「日本語でのゲーム」を選んだ者が多い。	— ³
「教える—学ぶ」の関係	・レベル別の分析、国籍別の分析のどちらも「教え合いたい」、「教えてもらいたい」、「教えたい」の順で多い。	— ⁴
環境	・レベル別、国籍別の分析のどちらも「2-4名のグループ」が最も多い。 ・ベトナムの学習者は「2-4名のグループ」を選んだ者が少ない。 ・韓国の学習者は「5名以上のグループ」を選んだ者が少ない。	・国籍との関連性 ($\chi^2(8)=16.0, p<.05$)
継続性	・上級の学習者は「毎回違う」が最も多い。 ・上級以外では「ときどき違う」が最も多い。 ・国籍別では、どの国籍も「ときどき違う」、「毎回違う」、「毎回同じ」の順となった。	・レベルとの関連性 ($\chi^2(6)=17.16, p<.01$)
評価	・どのレベル、どの国籍でも「評価してほしい」が大部分であった。	・就職を希望している国との関連性 ($\chi^2(2)=8.9, p<.05$)
期待すること	・どのレベルでも「コミュニケーションの自信や能力をつける」、「友達や知り合いを増やす」の順となった。 ・中国の学習者は「友達や知り合いを増やす」を選んだ者が特に多い。	— ³

ビジターセッションのトピックは誰が決めるのが良いかを問う質問では、どのレベルも回答が「教員」と「自分」の2つに約50%で分かれ、レベルとの有意な関連は見られなかった。しかし、国籍別においては、ベトナムの学習者の60%

³ ここでのデータでは期待度5未満の数値が20%以上であった。また、分割表が大きく、統計ソフトRにおいてフィッシャーの直接確率検定は行えなかった。

⁴ レベル、国籍、その他要素との関連性は見られなかった。

が「自分」を、インドネシアの学習者の80%が「教員」を選んでおり、国籍と回答の間に有意な関連性が見られた。また、教室外での日本語使用時間が週2時間以下と少ない学習者は自分でトピックを選びたい者が有意に多かった。

どのようなトピックが良いかを問う質問では、中級は「生活」、「歴史・文化」、「趣味・娯楽」、「政治・経済」の順で多かったものの、他のレベルは「生活」、「趣味・娯楽」、「歴史・文化」「政治・経済」の順で多かった。ただし、「生活」を選んだ割合に注目すると、初級は40%、上級は58%で、その差は大きかった。一方、国籍別においては、どの国籍も「生活」、「趣味・娯楽」、「歴史・文化」「政治・経済」の順で多く、最も多かった「生活」はそれぞれ40%以上（中国42%、ベトナム47%、韓国56%、タイ48%、インドネシア48%）であった。

どのような形式が良いかを問う質問では、どのレベルも「会話練習」、「日本語でのゲーム」という順で好まれていた。最も多かった「会話練習」はどのレベルも40%以上（初級42%、中級52%、中上級48%、上級44%）であった。一方、国籍においても同じ傾向があり、どの国籍も「会話練習」、「日本語でのゲーム」という順で好まれていた。ただし、中国以外の国の学習者は「日本語でのゲーム」が平均21%だったのに対し、中国の学習者は35%と非常に多かった。

ビジターセッションでの「教えるー学ぶ」の関係を問う質問では、レベル別の分析、国籍別の分析のどちらでも「教え合いたい」、「教えてもらいたい」、「教えたい」の順で回答が多かった。「教え合いたい」という回答はどのレベル、国籍でも50%以上（レベル：初級75%、中級66%、中上級73%、上級60% 国籍：中国68%、ベトナム55%、韓国79%、タイ53%、インドネシア73%）であった。

どのような環境で行うのが良いかを問う質問では、レベル別、国籍別のどちらの分析でも「2-4名のグループ」、「1対1」、「5名以上」の順で多かった。最も多かった「2-4名のグループ」という回答は、それぞれ55%以上（レベル：初級63%、中級63%、中上級65%、上級63% 国籍：中国62%、ベトナム55%、韓国74%、タイ68%、インドネシア76%）であった。しかし、国籍別の分析では、ベトナムの学習者は「2-4名のグループ」を選んだ者が有意に少なく、韓国の学習者は「5名以上のグループ」を選んだ者が有意に少なかった。

ビジターはいつも同じ相手が良いかを問う質問では、上級の学習者は「毎回違う」という回答が最も多く、53%となった。上級以外のレベルでは「ときどき違う」という回答が最も多く、それぞれが45%（初級67%、中級46%、中上級51%）を超えていた。レベルと回答の関連性を調べたところ、初級は「毎回違う」という回答が有意に少なく、上級は「毎回違う」という回答が有意に多かった。一方、国籍別の分析ではどの国籍も「ときどき違う」、「毎回違う」、「毎回同じ」の順になっていた。

ビジターに自身の日本語を評価してほしいかを問う質問では、どのレベル、どの国籍でも「評価してほしい」という回答が多数で、それぞれ80%以上（レベル：初級89%、中級87%、中上級85%、上級88% 国籍：中国85%、ベトナム85%、韓国81%、タイ91%、インドネシア91%）であった。しかし、自国で就職したいと考える学習者は「評価してほしい」と回答した者が有意に多かった。

ビジターセッションに期待することは何かを複数回答形式で問う質問では、どのレベル、国籍でも「コミュニケーションの自信や能力をつける」、「友達や知り合いを増やす」の順となった。国籍別で見た特徴としては、中国の学習者は「友達や知り合いを増やす」という回答を選ぶ者が全体の29%おり、他の国籍の平均よりも12%ほど高かった。

5. インタビュー調査

質問紙調査実施後、学習者のビジターセッションに対する意識を深く調べることを目的として、半構造化インタビューで調査を行った。対象者は、4.1でビジターセッションに否定的だった韓国出身の学習者2名とビジターセッションに肯定的であった中国、ベトナム、韓国、タイ、インドネシア出身の学習者、各2名の合計12名である（表6）。

ここでは、ビジターセッションの経験が豊富な学習者の意識を理解するため、上級の学習者に協力を依頼することにした。ビジターセッションに否定的な学習者に対しては、学習者の特徴を探る質問とともにこれまでのビジターセッションの経験や否定的な理由を聞いた。一方、肯定的な学習者に対しては、学習者の特徴を探る質問とともにこれまでのビジターセッションの経験、そして質問紙調査で回答したそれぞれの理由を聞いた。インタビュー内容の分析には、質

的データの分析手法のひとつである SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いた。SCAT とは、インタビュー等で得られた言語データをセグメント化し、1) データの中の注目すべき語句、2) それを言い換えるためのデータ外の語句、3) それを説明するための語句、4) そこから浮き上がるテーマや構成概念の順で、コーディングを行い、それらを基に、ストーリーラインや理論を記述していく分析手法である (大谷 2008)。

表 6 インタビュー調査の対象者

学習者 A	韓国、男性、2 年生	学習者 G	韓国、男性、2 年生
学習者 B	韓国、女性、2 年生	学習者 H	韓国、女性、2 年生
学習者 C	中国、女性、2 年生	学習者 I	タイ、女性、2 年生
学習者 D	中国、女性、3 年生	学習者 J	タイ、女性、2 年生
学習者 E	ベトナム、女性、3 年生	学習者 K	インドネシア、女性、3 年生
学習者 F	ベトナム、男性、3 年生	学習者 L	インドネシア、男性、2 年生

5.1 ビジターセッションに否定的な学習者の意識

以下はビジターセッションに否定的な学習者に対して行ったインタビューの結果を SCAT で分析し、得られたストーリーラインである。学習者 A と B に共通するのは、生活の中で日本語を使用する時間が長く、交流経験が豊かで日本語力に自信を持っている点である。その結果、学習者 A は、ビジターセッションは時間が短く深みのない交流だと考え、学習者 B は十分に交流してきたので必要ないと考えているようだった。また、学生ビジターに否定的である点、社会人ビジターには肯定的な意識を持っている点も共通していた。どちらの学習者も社会人ビジターは、様々な知識を与えてくれる存在として高く評価をしている。

【学習者 A】

将来、日本で就職することを目指しており、そのためには、日本語が最も大切だという認識を持っている。日本語力には自信を持っており、現在飲食店で日本語を使用できるアルバイトをし、講義やゼミも日本語で取っている。性格は積極的で、リーダーになる資質を持っている。また、別府に癒しや安定といった魅力を感じ、地域に溶け込んで生活をしており、地域の人とコミュニケーションをしたいという気持ちがある。ビジターセッションは、交流の深みがないと考えているが、地域の人には経験や知識が豊富で学べるがあるので興味を持っている。

【学習者 B】

日本で就職し、その後母国の韓国で働くことを希望する学生だ。教室外では、日本語を使用する機会が多く、留学生とも日本語で話すことが多い。日本語力が高く、自信も持っている。1 年生のときから、地域交流活動に参加した経験があり、積極性がある。学生ビジターとのビジターセッションは、積極性のない学生もいることから否定的である一方、社会人ビジターは、敬語や社会に出てから学ぶような言葉、知識などを教えてくれるので、役立つものだと考えている。しかし、これまで学生や地域の人と多く交流した経験があることから、日本人と交流したいという意識は低くなっている。また、これまでの経験から韓国と日本の文化は似ていると感じており、日本文化を学ぶということをやや否定的に捉えている。

5.2 ビジターに対する学習者の意識

以下はビジターセッションに肯定的な学習者に対して行ったインタビューの結果を SCAT で分析し、得られたストーリーラインの一部を抜粋したもので、学習者のビジターに対する意識について説明した部分である。

【学習者 C】

年上には敬語を使用しなければならないと考えていること、若者の考え方や若者から発信される文化に関心があること、若者なら英語でもコミュニケーションできること、若者と友達になりたいことなどから、社会人ビジターよりも学生ビジターとのビジターセッションを希望している。過去の経験から社会人ビジターとの交流は自信をなくすことがあ

るが、学生ビジターとの交流は自信がつくと考えている。また、海外滞在経験のある人は自身と同じように異文化を体験しているので、言語や文化について話す上でコミュニケーションしやすいと考えている。性別に関しては、男女どちらの言葉遣いも知りたいので、気にしないという。この地域で使用されている方言はよく理解していないが、イメージとして難しいと感じているので、ビジターに方言は使わないでほしいと考えている。

【学習者 D】

学生ビジターとの交流をより望んでいる。学生ビジターは英語ができるので、自分の日本語力が足りなくても安心できる。学生ビジターとは、ビジターセッションを通じて友達にもなりたいたいと考えている。社会人ビジターと話すときにはマナーに注意する必要があるため緊張するという。共通語でもコミュニケーションにあまり自信がない日本語レベルであるため、ビジターが方言を使うとより理解が困難になると考えている。

【学習者 E】

社会人ビジターとの交流をより望んでいる。学生ビジターと交流したさいは恥ずかしいという気持ちや怖いという気持ちを持ったことがあるという。特に男子学生には良い印象がなく、友達になれないと感じている。アルバイトで年上の人とよく交流する機会があるので、年上の考え方のほうが理解しやすいそうだ。社会人ビジターと交流すれば、地域の習慣や文化や人の考え方が分かり、地域の人とのコミュニケーションが円滑にできると考えている。相手を知ることができれば、相手の使用言語には拘らない。方言の使用は新しいことを学ぶ機会だと肯定的に捉えている。

【学習者 F】

学生ビジターとビジターセッションするのなら、それをきっかけに友達を作りたいと考えている。また、地域のことを知りたいが、地域の人と交流する機会は少ないので、社会人ビジターとも交流したいという。日本語能力向上のために日本語のみで話す交流相手を希望している。方言使用は気にしないが、これまで方言を使用したビジターに会ったことがないという。

【学習者 G】

ビジターとして最も望んでいるのはこれまで接点がなかった中学生、高校生である。そのような若者と交流して共感したり、自分の経験を教えたりしたいという。一方、社会人ビジターは、様々な知識を与えてくれると考えている。交流に対する希望のうち、交流相手の性別は特に重要ではないとしながらも普段交流の少ない女性とも交流したいと考えている。方言に興味を持っており、方言を使用すると、交流がより面白くなると肯定的に捉えている。

【学習者 H】

積極的な学生やそうでない学生もいるが、学生ビジターとの交流は友達作りができる機会であると考えている。社会人ビジターについては、マイナスのイメージがあったが、ビジターセッションを経験した後、肯定的な印象に変わったという。今は、学生ビジターより積極的に知識も豊富であるという印象を持ち、働いている20-30代の社会人ビジターをより希望している。異性ならより積極的に交流できるため、男性を希望している。交流は日本語で行わなければ意味がなく、努力するものだと考えている。また、海外経験のあるビジターと交流すると、日本語以外で話す可能性があるため、必要ないという。

【学習者 I】

同じ社会人ビジターと継続的に交流することは難しいが、学生ビジターとなら継続的に交流し、一緒に調査を行うことも可能であると考えている。これまで地域の人と交流する機会はあまりなく、地域のことを知らないという。日本で就職したい、あるいは国の日本企業で働きたいという気持ちを強く持っているため、経験や知識の豊富な社会人ビジターとの交流を最も希望している。話しやすく、経験があれば性別には拘らないという。ビジターとは日本語だけを使用することが自分のプラスになると考えている。方言に対しても肯定的である。また、海外経験がある人となない人では意見が異なるため、どちらとも交流してみたいという。

【学習者 J】

日本で働きたいと思っているため、日本の働き方、職場の文化に興味がある。また、別府に来て地方に対する意識が

好意的に変化し、地域のことが知りたいと考えている。しかし、自分たちの状況を理解し、英語や分かりやすい日本語で説明してくれるので、同世代の学生ビジターを最も希望している。性別で特に違いを感じないことから、性別は気にしていないという。また、ビジターセッションでは日本について話すので相手の海外経験は必要なく、方言は分からなければ聞けばよいと考えている。

【学習者 K】

課外活動などを通じて子供や年上の人との交流経験があるため、交流の少ない他大学の学生と交流し、地域での人脈・交友関係をより一層広げたいと考えている。また、交流経験のない 30 代までの社会人ビジターとも交流したいという。社会人ビジターとの交流は使用する日本語のレベルが上がり良い練習の機会になるものの、相手の年齢が高くなると方言やスピードで聞き取りが難しくなると感じている。しかし、ビジターセッションでは言語力向上のため、日本語だけで話したいと考えている。方言に対応できるようになったため、ビジターが方言を使用するかどうかは気にしないという。

【学習者 L】

学生ビジターとの交流は、和やかな雰囲気でお話しできると考えている。一方、年上の社会人ビジターからは知識を得ることができ、自分の日本文化に対する知識が深められるので、知識がある 30 代から 50 代のビジターに最も来てほしいと思っている。しかし、社会人ビジターには常に敬語を使用しなくてはいけないと感じている。方言に特に否定的ではないが、方言が多すぎてわかりにくかったという経験があることから共通語でのコミュニケーションを望んでいる。

まず、学生ビジターを特に望んでいたのは、学習者 C、D、J であった。これらの学習者に共通することは、教室外で日本語を使用する機会が少なく、日本語に自信を持っていないことであった。学習者 C、D、J を含んだ学習者全体の意識として、学生ビジターは継続的な交流ができる相手として期待しているようである。また、学生ビジターは社会人ビジターと比べ、英語でのコミュニケーションが可能な点、同世代で学生という同じ立場で自分達を理解してもらえるという点、敬語やマナーなどを配慮する必要がない点から、学習者にとって不安が少ないビジターだと考えられている。一方、ビジターセッションのさいビジターの積極性が不足していた、あるいは学習者への配慮を欠いた話題を取り上げた等の理由で、学生ビジターに否定的な印象を持っている者もいた。これはビジターセッションに否定的であった学習者 B も指摘していた点である。本学の学生ビジターに関しては、中井（2003）、永井（2013）らのようなビジターの募集を行わず、英語教員との話し合いのもとで、英語クラスの学習者が学生ビジターとして参加するという手法を取っている。そのような理由から学生ビジターの中には日本語学習者との交流に積極的ではない者や、言動に問題がある者もいるのである。

学生のビジターを望んでいるが、学習者 C、D、J と意見が異なるのが学習者 G、K であった。学習者 G、K に共通するのは課外活動に非常に積極的である点、そして、自分が経験していないことや知らないことに強い好奇心を持っている点である。学習者 G はこれまで接点がなかった中学生、高校生のビジターを望んでおり、そこで若者と交流して共感したり、自分の経験を教えたりしたいという。また、学習者 K は学内ではなく、これまで交流の機会がない地域の他大学の学生と交流をしたいと考え、地域での人脈・交友関係をより一層広げたいと考えていた。

社会人をビジターとして特に望んでいたのは、学習者 E、H、I、L であった。日常的に地域の人と交流する機会があることから社会人ビジターに対して親近感を持ち、さらなる理解を深めたい者（学習者 E）、過去の社会人ビジターとの経験から交流の意義を見出している者（学習者 H）、日本企業への就職と関連付けて考えている者（学習者 I）など様々であったが、共通しているのは社会人ビジターに対し、地域や文化に関する知識、経験などを教えてほしいと期待している点であった。本田他（2013）が行った教員のビリーフ調査においても、教員は学生ビジターより、社会人ビジターに日本の文化や知識を教えてほしいと考えていると報告されているが、このような教員のビリーフは、学生の期待とも一致しているといえる。また、具体的に学習者 H は働いている 20-30 代、先述した学習者 K は地域の他大学の学生に加え 30 代までの社会人とも交流したいと考えていた。平日に行われるビジターセッションの参加者の多くは退職者と主婦

であり、これまで学習者 H、K が望んでいるビジターとの接触の機会を提供することが難しかった。そのような経験から学習者が特に期待しているのだと考えられる。

性別に関してインタビューで明確に意見を述べた者は学習者 C、E、G、H であった。学習者 G は普段交流の少ない女性を、学習者 H は積極的になれるという理由から男性を希望していた。また、学習者 E は男性の学生との交流で不愉快な経験をしたことがあるため、男性の学生ビジターとは特に交流を望んでいなかった。学習者 C は男女の言葉遣いの違いについて言及しており、どちらも学びたいという積極的な意見を述べていた。

ビジターの方言使用に関しては、学習者 C、D、L がコミュニケーションの難しさを感じていた。これらの学習者は質問紙調査においても、方言を使用するビジターを望まないと回答した者である。一方、学習者 E、G、K は方言を使用するビジターでも使用しないビジターでも気にしないと回答したが、インタビューでは「積極的に方言を学びたい (学習者 E)」、「方言でのコミュニケーションに面白さを感じる (学習者 G)」、「方言に対応できるようになった (学習者 G)」などの理由が聞かれ、方言に対して肯定的な意見もあった。

ビジターの使用言語に関しては、学生ビジターを望んでいた学習者 C、D、J は日本語と他の言語でコミュニケーションができるビジターを望んでいた。コミュニケーションの不安を軽減し、コミュニケーションを円滑にするという理由からである。一方、学習者 F、H、I、K は日本語のみを話す相手を明確に望んでおり、その理由は日本語力の向上 (学習者 F、I、K)、日本語を使用しなければ日本語の授業で行われる交流としての意味がない (学習者 H) というものであった。

海外滞在経験の有無に関しては、学習者 C が異文化の経験がある人は言語面、文化面でコミュニケーションしやすいという理由から、海外滞在経験者を望んでいた。一方、それ以外の学習者は基本的に気にしないという立場であったが、インタビューからは「海外経験者が相手だと、日本語以外で話す可能性があるため必要ない (学習者 H)」、「海外経験がある人となない人では意見が異なるため、どちらとも交流してみたい (学習者 I)」、「日本について話すので相手の海外経験は必要ない (学習者 J)」と考えていることもわかった。

5.3 ビジターセッションに対する学習者の意識

以下はビジターセッションに肯定的な学習者に対して行ったインタビューの結果を SCAT で分析し、得られたストーリーラインの一部を抜粋したもので、学習者のビジターセッションの内容に対する意識について説明した部分である。

【学習者 C】

会話が苦手なので、自分の趣味のアニメなど、身近で簡単なことでビジターと会話練習がしたいと考えており、ビジターセッションでは若者から様々な知識を得たいと考えている。自分が知っていることは教え、自分が知らないことは学びたいので、お互いに教え合うスタイルを好んでいる。これまで、ビジターセッションで日本語について評価をしてほしいと感じてきたが、実際に評価してもらえたのは自身の日本語力ではなく、発表の内容等に関する評価だけであったという。そのため、日本語のレベルを評価し、文法や語彙などの問題点を教えてほしいと考えている。過去の経験から学生ビジターとのビジターセッションは自信が付き、社会人ビジターとのセッションでは、自信がなくなるという意識がある。

【学習者 D】

教科書で会話について学ぶ機会が少ないので、ビジターセッションでは会話練習がしたいと考えている。若者と歴史などについて話すのは難しいので、日常生活について会話をし、お互いに教え合うなかで、文化を学び合いたいという希望を持っている。ビジターセッションで発表やインタビューをするのは大変であるため、あまり望んでいないという。ビジターには、自分の日本語が理解できるか評価してほしいと考えている。これまでのビジターセッションでは、知識が増えたということはないが、学生ビジターの英語が上手ではないことから、自身の日本語力に自信がついたという。

【学習者 E】

ビジターセッションでは日本語や日本の文化を楽しく学ぶために、伝統的なゲームをすることを希望している。グループのサイズが大きすぎると全員とコミュニケーションをとるのが難しく、1対1は考え方や興味が違う相手とペアになると話が弾まないため、2-4人のグループでしたいと考えている。コミュニケーションを円滑にするために相手と自分がお互い興味があることを自ら選び話したいという。また、自分の経験話し、他の人から面白い経験や必要な知識を教えてもらうなどし、お互いに教え合いたいという。普段よく接するアルバイト先の人は、日本語の間違いを指摘しないため、ビジターセッションでは評価してほしいと考えている。これまでの経験で、ビジターセッションで日本語の自信はつづくが、ビジターセッションは時間が短いので知識は深められず、ビジターとは友達になれないと感じている。

【学習者 F】

生活で日本語を話す時間が少ないと感じていることから、ビジターセッションでは会話練習を希望している。会話に集中でき、より多くの練習ができるので、1対1で話したいと考えている。また、日本語に自信がついたので、教えてもらうだけでなく、お互いに教え合いたいという。トピックは経験がある教員に決めてほしいと考えているが、日本人の興味に合った話しやすいトピックを希望するなど、相手との関係性も重視している。しかし、今は就職のことをトピックにして話したいようだ。友達との会話では、日本語を間違えても会話が続けられるので、ビジターセッションでは日本語を評価してほしいと考えている。過去の経験からビジターセッションは自信がつくが、友達などを作ることはできないと感じている。ビジターセッションでは知識を深めるために深い話をする必要があるが、そのようなことは仲良くなった人としか話せないと感じている。

【学習者 G】

ビジターセッションは、言語の練習の場としてではなく、自身の考えを伝える場として意義があると感じ、ディベートを行いたいと考えている。また、働いている人なら経済、学生ならライフスタイルなど相手に合わせ適したトピックを選びたいと思っている。方言や少人数で話すことへの不安を感じておらず、より多くの発話機会の得られる1対1のペア、もしくは、2-4人の小さいグループでの交流を希望している。ビジターセッションでは教え合うということを理想としているが、相手に何かを伝える経験がしたいと思っている。自身の日本語の問題点を知り、改善できる機会なので、評価を前向きにとらえている。初級のレベルで行った学生ビジターとの交流では、自信につながった経験、友達を作った経験がある。そのため、社会人ビジターとの交流でも、知り合いが作れると感じており、ビジターセッションに対する期待は大きい。

【学習者 H】

学習者は日本人と話す機会が必要だと思うので、ビジターセッションでは会話練習を希望している。特に希望はないが自分で話しやすいトピックを選びたいという。以前に1対1やグループで交流した経験があるが、1対1のほうが良かったと感じている。また、相手には自分の日本語の間違いを教えてほしいという気持ちはあるが、評価という厳しい雰囲気になるので、望んでいない。ビジターセッションは、自分の日本語を試し改善する場と捉えており、交流を通じて自分の日本語に関する知識を深めたいという気持ちを持っている。

【学習者 I】

日本語に自信がないことから、ビジターセッションでは、2-4人グループで会話練習を行うことを希望している。1対1は緊張し、5人以上だと話す機会が少なくなるからだという。大学の多文化の環境を生かしお互いに知っていることを教え合いたいと考えている。年齢が高い社会人ビジターとは歴史、会社員の社会人ビジターとは経済、学生ビジターとはライフスタイルについて、といったように相手によってトピックを変えたいと思っているが、その中でも政治経済への関心が高い。ビジターセッションでは日本語だけを使い、スキルアップに役立てたいと思っており、自分の話し方についての評価も希望している。特に、自分が日本人のように自然に話せているか評価してほしいと考えている。トピックに一貫性を持たせ、同じメンバーと継続することを希望しており、そうすることでより良い交流になるのではないかと考えている。現実的には社会人ビジターとそのような交流をすることは無理だと思っているが、学生ビジターとなら、継続的な交流を通じて、調査を一緒にしてみたいと思っている。

【学習者 J】

普段の授業では会話練習の時間が少ないと感じているため、ビジターセッションでは会話練習を希望している。グループでの会話練習は、上手な人がいた場合は状況によっては自分が話せないレベルの話になってしまうため、相手と1対1で行いたいと考えている。ビジターセッションでは、教え合うよりもビジターの実際の職場での文化や経験などを教えてもらうことを期待している。自分の知っていることは少なく、今の日本語力では知識や経験を伝えることは難しいと考えているからである。トピックを決めるのは経験やアイデアが豊富な教員が望ましいと思っている。また、辞書で調べた言葉を適切な場面で正しく使えているという自信がないため、言葉の使い方を評価してほしいという。

【学習者 K】

同世代の人々とは主に生活、上の世代の人々とは伝統文化や歴史、地域について話し、知識を得たいと考えている。普段、教室外で自分の国のことを説明することが多いので、交流を通じて教えてもらいたいという気持ちが高い。積極的に前向きな性格であることから、地域交流で日本語を話すことに意欲的で、方言や少数で話すことへの不安は感じていない。地域交流の形式としては、これまでディスカッション形式のものをしてきたので、お互いに楽しめるようなロールプレイもしてみたいと思っている。話すなら1対1のほうが練習になり、自信もつくと考えている。複数いると、話す機会も少なくなり、自信がなくなることもあるという意識を持っている。評価されることを希望しており、語彙の使い方や発音、敬語などを指導してほしいという。

【学習者 L】

学生同士で交流するのであれば、ロールプレイが楽しく勉強になるので良いと考えている。また、1対1で話すのは、相手の性格によって左右されてしまうので、小さいグループのほうが望ましいと思っている。これまでビジターセッションの中で旅行について話すことが多く、このトピックが話しやすく良いと感じている。また、交流では知りたいことを聞き、知っていることを教えたいと考えている。そのため、旅行をトピックにしてお互いに知っていることを教え合いたいという気持ちを持っている。また、自分の日本語の能力を知りたいので、評価をされたいと考えている。ビジターセッションを通し、コミュニケーションスキルを高め、自信をつけたいと期待している。

まず、ビジターセッションで取り扱うトピックをどう決めるかに関しては、話しやすいトピックを選びたい、あるいは興味があるトピックを決めたほうが良いという理由から学習者 E、H は自分でトピックを決めたいと考えていた。一方、学習者 F、J は、教員はビジターセッションの経験が豊富であるという理由で、教員がトピックを決めたほうが良いと考えていた。トピックに関しては、学習者 C は「若い人と話したいので、自分の趣味のアニメなど身近で簡単なことが良い」と、学習者 D は「若者と歴史など難しいことを話すのは難しいので、日常生活について話したい」と具体的な意見を述べていた。5.2 で述べたように学習者 C、D は日本語でのコミュニケーションに自信を持っておらず、学生ビジターとの交流を強く希望している者である。また、学習者 G、I、K は、トピックはビジターに合わせて決めると良いと述べている。

ビジターセッションの形式に関しては、多くの学習者が会話練習を希望していた。その理由は会話に自信がないこと（学習者 C、I）、授業や教科書では会話練習の時間が少ないと感じていること（学習者 D、J）、生活で日本語を話す時間が少ないと感じていること（学習者 F）など様々であった。楽しく学べるという理由からゲームを選んだのは学習者 E、ロールプレイを選んだのは学習者 K、L であった。また、学習者 G はビジターセッションには言語の練習の場としてよりも、自身の考えを伝える場としての意義があると感じているので、ディベートがしたいと考えていた。日本人とディベートができる能力を持っているという自信と相手に自分の意見を伝えたいという強い気持ちから、このような意見が出たのだと考えられる。

「教えるー学ぶ」の関係に関しては、お互いの知っている、あるいはお互いが知りたい文化や経験を教え合いたいという者が多かったが、学習者 F のように日本語に自信がついたので、教えてもらうだけではなくお互いに教え合いたいと自己の成長に言及している者もいた。また、教えてもらいたいと考える者は、「教え合うよりもビジターの実際の職場

での文化や経験を教えてもらいたい (学習 J)」、「教室外で自分の国のことを説明することが多いので、ビジターセッションでは教えてもらいたい (学習 K)」、「自分の間違いを直してほしいので、教えてもらいたい (学習 H)」など様々な理由を述べていた。学習者 G は自ら主体的に教える立場に立ちたいと考えており、これまでのビジターセッションの経験では教わることが多かったのも、何か相手に伝える経験をしたいと考えていた。

ビジターセッションにおいて 1 対 1 の環境を望む者は、「集中できる (学習者 F)」、「発話機会が多い (学習者 G)」、「グループだと上手な人がいた場合に影響を受けるが、1 対 1 ではその影響がない (学習者 J、K)」などの理由を述べていた。一方、2-4 人グループで交流したい者は、「1 対 1 は緊張し、5 人以上だと話す機会が少なくなる (学習者 I)」、「人数が多すぎると全員とコミュニケーションをとるのが難しく、1 対 1 は考え方や興味が違う相手とペアになると話が弾まない (学習者 E)」と考えていた。

ビジターに評価を望む者は学習者 H を除く全員であった。学習者 H は厳しい雰囲気になるので評価されたくないと考えていた。一方、評価を望む者は、自分のレベルが知りたい、自分の日本語の問題点を改善したいといった理由がほとんどであるが、学習者 E、F のようにアルバイト先の人や友達からは間違いの指摘を受ける機会が少ないという理由で評価を期待する者もいた。

ほとんどの学習者はビジターセッションで自信をつけられると考えていた。ただし、学習者 C のように相手を学生ビジターに限定している者もいた。また、ビジターセッションで知識を深めたいと考える者がいる (学習者 H) 一方で、過去の経験から「ビジターセッションは時間が短いので知識は深められない (学習者 E)」、「交流授業で知識を深めるために深い話をする必要があるが、そのようなことは仲良くなった人としか話せない (学習者 F)」など、ビジターセッションの問題点を指摘する者もいた。さらに、質問紙調査ではビジターセッションで友達や知り合いを増やしたいと期待している者が多かったが、インタビュー調査では、学習者 E、F のようにビジターセッションで友達を作ることはいと考えている者もいた。

6. 質問紙調査及びインタビュー調査からの知見

本調査では、384 名の学習者を対象に質問紙調査を行った結果、92%がビジターセッションを希望していることがわかった。上級の学習者はビジターセッションに有意に否定的な者が多く、国籍で見ると特に韓国の学習者が否定的であった。ビジターセッションに否定的な上級の韓国人学習者のインタビュー調査から、ビジターセッションは時間が短く深みのない交流だと考えていること、すでに多くの交流活動を行ってきており交流は十分であると考えていることがわかった。そして、これらの学習者は生活の中で日本語を使用する時間が長く、交流経験が豊かで日本語力に自信を持っているという特徴があった。

一方、ビジターセッションに肯定的な学習者がどのようなビジターを希望しているかを分析したところ、初級の学習者はビジターの年齢や言語使用に関して明確な希望があるようであった。初級の学習者は 10-20 代で、日本語とその他の言語を使用するビジターを最も希望しており、他のレベルより有意に多かった。性別、年齢、職業、方言使用、海外滞在経験に関しては、レベル別、国籍別のどちらの分析においても「気にしない」という回答が最も多かったものの、有意差を調べることで学習者の傾向が見えてきた。たとえば、ビジターの年齢、職業、言語使用に対する希望は学習者のレベルと関連性が、性別、年齢、方言使用、海外滞在経験に対する希望は国籍と関連性があった。また、国籍やレベルごとの分析に加え、様々な学習者の背景との関連性を調べたところ、希望するビジターの職業は学習者が将来就職を希望する国との間に有意な関連が見られた。また、言語使用の希望は学習者の教室外の日本語使用時間と、方言使用は学習者の友達の数と有意な関連が見られた。

ビジターセッションの内容に関する分析では、ビジターセッションの形式、「教えるー学ぶ」の関係、交流の環境、評価の希望に関しては明確な希望があることがわかった。具体的には、会話練習を希望すること、学習者とビジターが教え合うこと、2-4 人グループで交流すること、評価を希望することがレベル・国籍別の分析において最も望まれていた。トピックの選択をだれがするかに関しては、レベル・国籍別の分析で「教員」、「自分」という 2 つで意見が大きく割れ

ていた。トピックの内容に関しては、中級レベルを除く全てのレベル・国籍において「生活」、「趣味・娯楽」、「歴史・文化」「政治・経済」の順で多かった。交流の相手に関しては、上級以外のレベルでは「ときどき違う」という回答が最も多く、国籍別の分析でもどの国籍も「ときどき違う」という回答が多かった。また、ビジターセッションに期待することは何かを問う質問では、どのレベル・国籍でも「コミュニケーションの自信や能力をつける」、「友達や知り合いを増やす」の順となった。

さらに質問紙調査に加え、インタビュー調査を行ったことで、どのような理由でどのようなビジターを希望するか、どのようなビジターセッションを望むかということも具体的に見えてきた。例えば、質問紙調査で「気にしない」と回答している学習者がなぜ気にしないのかという理由を明確に聞くことができ、質問紙調査で「気にしない」と回答しながらも、実は明確な希望があることが見えてきたケースもあった。また、インタビュー調査からは、同じ回答でも、学習者の様々な個人的要因、たとえば生活環境、日本語や日本語学習に対する意識などでその理由が異なっていた。

7. 本学におけるビジターセッションの問題と改善法

最後に、本学におけるビジターセッションの問題に触れ、それをどのように改善していくべきか、これまでの調査から得られた結果をもとに3つの点に絞り述べておきたい。

① 学生ビジターとの交流促進に向けて

学習者は学生ビジターに対しては、友達になることを期待していることがわかったが、実際のビジターセッションでは教員が連絡先の交換を促すことは少なく、学習者に任されている。インタビュー調査から、その後交流を続けている学習者もいることがわかったが、教員が実施する学生ビジターとのビジターセッションは1回で完結するものであるため、1回限りの交流で終わってしまう者も多いようである。そのため、一部の学習者が問題として指摘しているように、仲が深まるような深い交流にまで発展していないのが現状だろう。このような問題を改善するためには複数回の継続したビジターセッションの計画を立て、同じ学生ビジターと接する機会を提供するだけでなく、一つのトピックに関して活動を発展させていくビジターセッションを実施していくのが望ましい。たとえば、3回のビジターセッションを設定し、2回は準備などに時間を割き、3回目は共同で発表を行うことを決めておくと、発表に向けて教室外でもコミュニケーションを行うことが期待できる。教員は学生ビジターに学習者とともに学ぶことを期待している（本田他 2013）が、実際にどちらの成長も促すようなタスクを与えることで、両者の交流を促進できるのではないだろうか。

② 社会人ビジターとの交流促進に向けて

学習者は社会人ビジターから知識を得ること、そして共に教え合うことを期待しており、教員は社会人ビジターに知識を与えながら聞き役になるという役割を求めている。しかし、社会人ビジターの中には、それらの期待に応えられず一方的に話してしまうビジターがおり、教員の中には社会人ビジターを招くことに消極的な者もいるという（本田他 2013）。本学の場合、準備を想定し事前にビジターセッションのテーマはビジターに伝える方法を取っているが、現在の方法でも教員が扱うトピックについて社会人ビジターに配慮しつつ運営すれば、社会人ビジターが学習者に知的満足を与える存在になることも十分に可能である。むしろ問題となるのは知識を与えるのではなく、聞き役になれるかという点である。ボランティアの日本語教師と非母語話者の接触場面を調査した一二三（1999）によると、母語話者は日本語レベルが劣勢である非母語話者との会話において、自ら会話を主導する必要性を感じ、話し手・聞き手の役割分担が成立してしまうことが多いという。しかし、自分は与える側であるという意識が強い傾向にあるビジターでも、学習者との相互交流のなかで一方的に与える関係から対等の立場に近づく様子が見られる（本田他 2012）という報告もあり、ビジターの聞く姿勢、学ぶ姿勢に関してはビジター自身が交流の経験を積み重ねることで、変容していくことが期待できる。したがって、教員はその変容を見守りつつ、変容が進むよう何らかの働きかけをしていく必要がある。たとえば、本調査でわかってきた学習者の意識を社会人ビジターに伝え、自身の姿勢を振り返る機会を与えることができれば、意識の変容を促すことも可能ではないだろうか。

③ ビジターセッションの見直し

今回の調査では、同じ上級レベルでも日本語に自信がなく日本語を使用する機会が少ない学習者は学生ビジターを、社会人ビジターに親近感を持つ者や日本企業への就職と関連付けて考えている者は社会人ビジターを望んでいた。つまり学習者の期待は様々で、それに応じていくのであれば、教室には多様なビジターを招くことが必要だということになる。本学では学内の英語クラスからのビジターを招くビジターセッションと地域からのビジターを招くビジターセッションを実施しており、この2つを実施することでビジターの多様性を実現している。前述したように、現在、初級は英語クラスからのビジターを招くことが決められている。しかし、中級以上のレベルは教員の判断に委ねられており、担当する教員の中にはビジターセッションの実施、そして、社会人ビジターとの交流に消極的な者もいる。しかし、ほとんどの学習者がビジターセッションを期待していること、必ずしも学習者が社会人ビジターに否定的ではないこと、学習者によって交流したいビジターは様々であることを理解し、ビジターセッションの実施や方法を検討していく必要があるだろう。

今回の調査ではどのレベル・国籍の学習者も生活や趣味・娯楽に関する話題の会話を望んでおり、ビジターと学習者がお互いに知っていることを教え合いたいという者が多かった。本学では寺嶋他（2013）の報告のように、インタビュー形式や発表形式のビジターセッションがよく実施されており、学習者のニーズとは異なっていると考えられる。したがって、教員は学習者のニーズに耳を傾け、会話練習も取り入れる必要があるだろう。

ビジターセッションで会話練習を行うさい、教員は文脈の設定や目標とする表現の使用といった制約がある学習活動を計画する傾向がある。教員が文脈や表現の使用を制約すれば、学習者及びビジターの言語使用をコントロールでき、学習者の言語等に関する不安を軽減できるという効果があるからである。赤木（2013）は、学習項目を焦点化し、その使用を目標にした場合、インターアクションの自然度は低下すると指摘している。本来ビジターセッションはネウストブニー（1982）が述べているように、教室の場面を実際のコミュニケーションの場面へ近づけるのに有効なものである。したがって、教員はインターアクションの自然度が低下しないよう注意を払いつつ、ビジターセッションの内容を考える必要もあるだろう。

そして、学習者のビジターセッションに対する期待に耳を傾けることも大切だが、コースにおけるビジターセッションの位置づけを見直し、運営していくべきである。そのためには、本調査で明らかになった学習者のビジター像やビジターセッションに対する意識を教員間で共有するとともに、効果的な運営方法を組織的に考える機会を設け、教員側の意図を学習者にも意識的に伝えていくことも必要なのではないだろうか。

付記

本研究は2013年立命館アジア太平洋大学の学術研究助成を受けた「インターアクションを取り入れた言語教育の可能性の検証―統合型インターアクション学習モデルの構築に向けて―」の研究成果の一部である。

参考文献

- 赤木浩文 (2013) 「日本語コースにおけるビジターセッションの学習効果と課題」『専修大学外国語教育論集』41, pp.87-104
- 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要教育科学』54 (2), pp. 27-44
- 小笠恵美子 (2010) 「ビジターセッションで参加者双方は何を得るかー留学生と日本人学生によるスピーチ作成に向けた会話の分析ー」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』2, pp. 32-40
- 寺嶋弘道・板橋民子・佐々木美江・戸坂弥寿美 (2013) 「中級におけるビジターセッションの意義と問題点ー立命館アジア太平洋大学のケースー」『ポリグロシア』24, pp. 224-234
- トムソン木下千尋・舩見蘇弘美 (1999) 「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者ーその問題点と教師の役割ー」『世界の日本語教育』9, pp. 15-28
- 中井陽子 (2003) 「談話能力の向上を目指した会話教育 ビジターセッションを取り入れた授業の実践報告」『講座日本語教育』39, pp. 79-100
- 永井涼子 (2013) 「日本語会話ボランティアの制度化が持つ意義と課題」『大学教育』10, pp. 67-78
- ネウストブニー, J. V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- 一二三朋子 (1999) 「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連: 日本語ボランティア教師の場合」『教育心理学研究』47 (4), pp. 490-500
- 本田明子・松井一美・山田亜耶 (2012) 「ビジターセッション参加者の意識の変容ー学習者との相互交流は日本人協力者に何をもたらすのかー」『日本語教育国際大会 名古屋2012』ポスター発表 pp. 254
- 本田明子 (2013) 「学習者と母語話者のインターアクションによる日本語学習の可能性ー立命館アジア太平洋大学における地域交流授業の実践からー」『立命館言語文化研究』24 (3), pp. 131-141
- 本田明子、石村文恵 (2013) 「世代の異なるビジターに対する日本語教員の期待ービジターセッションについてのビリーフ調査の結果からー」『日本語教育方法研究会誌』vol. 20 No. 1, pp. 48-49
- 宮崎幸江・鈴木庸子 (2005) 「中級クラスにおけるビジターセッション: 実践例と課題」『ICU日本語教育研究』2, 67-75
- 村岡裕英 (1992) 「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について: 「ビジターセッション」場面の分析」『世界の日本語教育』2, pp. 115-127